センター通信　第258号

2009年３月４日発行

名古屋エスペラントセンター　Nagoja Esperanto-Centro
461-0004名古屋市東区葵一丁目26-10ユニーブル新栄301号
郵便振替　00840-8-40765［名古屋エスペラントセンター］
http://homepage2.nifty.com/nagoja-esperanto/

名古屋エスペラントセンター蔵書のエス和、和エス辞典いろいろ
竹中治助さん、山田天風さん、豊田元樹さんが持っていたふるい辞書を含む
撮影：山田義

維持員総会への参加のお願い

名古屋エスペラントセンター維持員のみなさまへ
2009年度の センター維持員総会を開きますのでご出席ください

2009年３月14日(土)　午後３時より
議題　前年度の活動などの報告と今年度の活動などの計画
　　その他
場所　名古屋エスペラントセンター（名古屋市東区葵一丁目26-10 ユニーブル新栄301号）

名古屋エスペラントセンターはその規約第8条に「センター維持員総会」は全ての維持員により構成される「センター」の最高機関である、と明記しています。このように、本総会はセンターにとって非常に大切な議決機関でありますが、実際には出席して下さる方が多くないのが現状です。

出席が多くない現状の背景には、センターの活動の低迷があることは認めざるをえません。しかし、だからこそ、この低迷打開のためにも、一部の委員に任せっぱなしにするのではなく、自らも仕事と責任の一部を負ってくださる方が必要です。

今回は簡単な夕食を取り寄せて懇談の時間も設けました。どうか、一人でも多くのご参加をお願い申し上げます。

名古屋エスペラントセンター委員長　　山口真一

名古屋エスペラントセンターは、地下鉄「新栄町」下車、２番出口から錦通を東へ徒歩 3分のビル「ユニーブル新栄」の３階にあります。喫茶店「赤トンボ」の左となりが入り口です。

『高杉一郎・小川五郎　追想』について

伊藤俊彦

この１月に、『高杉一郎・小川五郎　追想』と題する追悼文集が刊行されました。故人の娘さん二人が発行人となっている私家版ですが、関西エスペラント連盟で入手できるとの情報がありましたので、私も注文して購入しました（1,200円、279ページ）。

本書には、加藤周一、不破哲三、澤地久枝、田中克彦といった有名人を始めとして、児童文学関係、勤め先の大学（高杉は静岡大学、和光大学の教授を長く務めました）の同僚教員、教え子、編集者、隣人、親族など、多彩な執筆者が寄稿しています。エスペランチストも、峰芳隆、栗田公明、望月正弘さんなど、何人かが寄稿しています。早稲田みかさんは、父の早稲田裕と高杉との関わりを語っています。

執筆者のなかには、雑誌『エスペラントの世界』編集長で、当時、津在住だった嶋田恭子さんの名前も見え、なつかしい思いに誘われます。嶋田さんは、1984年10月に、三重県立美術館で中村彝展が開催されたのを機に、三重エスペラント会が高杉を講師として「作品『エロシェンコ氏の像』をめぐって」と題する講演会を開催したことに言及しています（ｐ164）。私はその講演を聴講し、終了後、駅前のレストランで開かれた高杉夫妻を囲む会食にも参加しました。もう四半世紀も前のことです。

高杉は３人の娘と孫に囲まれ、99歳という長寿を全うしました。晩年は、さすがに執筆することはなくなったとはいえ、なお知的好奇心は衰えず、旺盛に読書を続けていた姿を何人もの知人が回想しています。99歳でホブズボーム『わが20世紀・面白い時代』を読んで興じるというのは驚異的ですね（ｐ97）。97歳のときには、検査入院を終えて退院したその日に映画館へ直行し、『ヒトラー～最後の12日間』を見て面白がったなどというエピソード（ｐ238）も出てきます。スターリン主義やナチズムなど、現代史に寄せる関心は最期まで衰えなかったようです。

ところで、私は、高杉の著書は何冊か読んではいるのですが、正直のところ、愛読者だとはいえません。むしろ、読むたびに違和感を禁じ得ません。高杉は、戦前は俊敏なジャーナリストであり、戦後はシベリアで俘虜となってスターリン体制下のソ連の実態に直面し、また、帰国後、『極光のかげに』の刊行により、国内のスターリン賛美者たちからさんざん非難されます。そのような体験をし、何度も辛酸を舐めているにもかかわらず、歴史そのものの、あるいはソ連の政治・経済体制の分析がどうにも不足しているのではないか、また、総じてあまりに平明にすぎ、「文学的」にすぎるのではないか、等々。

加えて、私は、個人的には　高杉が翻訳に心血を注いだエロシェンコにも、また、フィリパ･ピアスを始めとする児童文学にも積極的な関心を持てません。ピアスの『トムは真夜中の庭で』も、読んではみたのですが、世評極めて高い名作であるはずなのに、一向に感心しませんでした。もっとも、高杉一郎訳のエロシェンコは、伊東幹治という、戦争帰りのすれからしの文学中年を魅了して、彼がエスペラントに関わるきっかけを作ったのですから、それはそれで大いなる魅力があるのだろうとは思うのですが、食指が動きません。

本書でも、高杉に対する賛辞が並ぶなかで、岩波書店の編集者であった小野民樹が、高杉のスメドレー伝に対して、「これはエロシェンコ伝にも通ずることなのだが、ちょっ

ときれいごとにすぎる、人間に陰翳がないと思った」と評し、「書き手が素直すぎるのだと思った」と、やや他の執筆者とは異なるトーンで書いています（ｐ169）が、私の印象もそれに近いですね。

もっとも、その高杉も、『極光のかげに』が刊行されたときに、宮本顕治が「あの本は偉大な政治家スターリンを汚すものだ。今度だけは見のがしてやるが」と高杉に向かって傲然と言い放ったことは、しっかりと書いています。宮本の後妻は高杉夫人の姉だそうですが、高杉は、宮本から和解のため何度か会食の誘いがあっても、「ぼくは行きませんよ」と「きつい声で」言った（ｐ177〜178）そうです。また、埴谷雄高がやはり同書を偽書ではないかと疑っていることについても、反論を加えています。そうしたことからも伺えるとおり、高杉はナイーブな人ではもちろんなくて、むしろ「賢者は政治をしない」という意味で、きわめて賢明な、よくものの見えていた人物であったのであろうという印象は持つのですが。

どうも中途半端な、煮え切らない文章になりましたが、本書には、妻や娘、孫などと一緒にくつろぐ高杉の写真が多数掲載され、高杉の人物や彼が築いた家庭の様子が髣髴とします。高杉を直接に知る方にはとりわけ感慨深い本でしょう。なお、『わたしのスターリン体験』他については、ＲＯの2008年12月号に、また『征きて還りし兵の記憶』については、名古屋エスペラントセンターのホームページ（「本と批評」のコーナー）に、それぞれ拙文が掲載されておりますので、よろしければごらんください。

iPhone とエスペラント

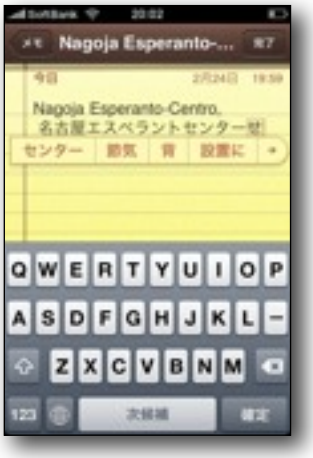
Iphone は携帯電話であるが家で使っているパソコンの子機という感じで持ち歩いている。音楽や写真はもちろん、いわゆるケータイメールのアドレスもあるがそれを人に知らせる必要はなく パソコンメールのアドレスがそのままで受信や発信ができる。外を歩くときはグーグルマップを開けば目の前の農道まで確認ができ、駅から行きたい会場までの道順も大きな画面が案内してくれる。カタカナでビアウィストクと入れると、Bialystok と書かれた地名の上にピンが立つ。この夏世界エスペラント大会に参加の人には大いに役立つだろう。

この携帯電話にはユニコードも入るので、字上符付きの文字でエスペラントを表示できる。 今私はエスペラント訳聖書のテキストを iPhone に移している。まず、インターネットでエスペラント訳聖書のテキストを無料で自分のパソコンにダウンロードする、そして、無線 Lanを通してパソコンと iPhone の間でテキスト

などをやり取りできるアプリケーション Air Sharing （600円）を利用して、パソコン上で聖書テキストを章ごとに作ったファイルを iPhone に渡した。私の場合は日本語訳とエスペラント訳を並べて読み比べができるように工夫した。

ただ教会の礼拝中などで説教を聞きながら聖書を調べようとして iPhone を開くと、「礼拝中になんですか、ケータイメールなんかして！」とあたりの席の人にしかられるのではないかとという心配はある。ともかく、あの分厚い旧新約聖書が胸のポケットに何冊も入るのだから愉快ではないか。

会議や大会で講演するとき、（といっても私にはそんな機会がないが）プロジェクタに iPhone をつなげば　iPhoneに取込んだ写真を投影できる。ロッテルダムから帰ったとき教会で機会があり世界エスペラント大会の Ekumena Diservo などの話をしたが、そのときは iPod Touch だったが手元で操作しながら壁いっぱいに映しながら話をした。



今、私たちの教会の礼拝では iPod を使って賛美歌の歌詞や使徒信条を壁に映している。ノートパソコンとは違い、場所を取らないし、パソコンのディスプレイが聴衆の目に邪魔にならない。去年のザメンホフ祭では、エスペラントの歌の歌詞を JPEG 書類で iPhone の中に準備して持って行ったのだが係の手違いでプロジェクタが準備できていなかったので利用できなかった。一部の歌詞を白板に書いて歌唱指導した。

iPhoneの日本語入力には２通りのキーボードがある。テンキーというのとフルキーボードだ。わたしにはパソコンのキーボードと同じ配列のローマ字入力の方式が便利だ。 字上符つきの大小12の文字はあらかじめパソコン上で、ある方法で登録しておく。それを iPhone と同期すれば iPhone 上で ĉu ŝi ĵetas aŭ eĥas ĝin? という文もメール送信できる。もちろん、メールなどわざわざ字上符き文字を使わなくても x を使えばいいことは心得ている。

三省堂の大辞林や研究社の英和／和英辞典を入れておくことができる。ただし、エスペラント辞典はまだ出版されていない。でも、インターネット上の辞書ページを開いてそこで単語を検索はできる。　　山田　義

聴く人がそこにいる

山田　義

犬山のエスペラント会の新年会に招かれてちょっとだけエスペラントで話す機会があった。この１月、Rondo Sonkisoj では家庭料理をテーブルいっぱいに広げてにぎやかな夕食会があった。食べ終わったころにどうしてもエスペラントで話してみたくなった。短くあいさつをして、話題にする物を見せながら話した。手作りの46ページほどの、2008年のエストニア、ラトビア、オランダの旅日記「運河の風」だ。

聞く人６人から数分をいただいた。話しやすかったと感じたのは、みな静かに聞いてくれたことだ。座って聞く側では、話し手に遠慮して声は聴くが話し手の顔は見ないということもある。でもここでは、顔を上げて、目を合わせて聞いてくれた。話し終わってからこの本をプレゼントした。

横浜の世界大会では、勧められて「今年私が出した本」の紹介コーナーに立った。場所はというと、落ち着いた室内ではなく、会場のサロンを行き交う人たちの見える廊下の片隅だった。テーブルが一つ、椅子が10脚ほど。座っていた人は、特に私の話を聞きたいとか、楽譜や音楽に興味があって集まった人たちではない。ちょうど椅子が並んでいたから座っていたら何やら話し手が立っている、といった感じだ。それでも、私のように人前で話をするという経験の少ない者にとって緊張の場所だった。話しやすいかどうかは聞き手に影響される。ヨーロッパやアジアの人たちが座っていた、そこには、顔を上げて私の目を見て聴いてくれる何人かがいたので助かった。それに、この大会に参加していた息子夫婦もこの時間に合わせて座っていた。二人とも顔を伏せずに、時にはうなずき、時には笑って、いつもの家庭では見られないエスペラントでやる私の話を聞いていた。

Memora foto de la novjara festeno, kion okazigis Rondo SONKISOJ kaj Inujama Esperanto-societo.　(Karto de Hasegaŭa Cutomu)

去年の夏、ベンツピルスのBET-44で大勢の前で話したときも、私の話の面白さというより、白板に書いたり張り出したりした日本語の文字に興味があったのだろう、顔を伏せたり、退屈そうにしている人はだれもいなかった。途中で質問があったり、白板に書く単語が間違ったりするとすぐに注意の言葉が飛んでくる。応えていたりするうちに時間が飛んで行く、話の順序も狂ってしまいそう。前に立って話をする私も、聴く人たちの反応を見ながら話した。

語学の練習は、アルバイトを雇ってもいいからそのコトバが分からない人でも目の前に座ってもらって話しを実践することだと、聞いたことがある。

聴く人があるので人は話すことができる。

ORDENO de Verda Plumo　について

伊藤俊彦

Josip Pleadinという人が編集した ORDENO de Verda Plumo という本を入手したので、簡単に紹介してみたい。本書は、現時点におけるエスペラントの執筆者大事典であり、小林司氏は本書を紹介した『緑のペンの業績集』と題するエッセイで、本書には、1091人のエスペラント作家の略歴が掲載され、顔写真の掲載も448人に及ぶと指摘している。日々新しい書き手は誕生しているにしても、書物のみならず、ネット上で、かなりのエスペラント作品が読めるようになっている現在、これだけ網羅的な事典の発行は画期的なことであり、読書好きや研究熱心な人には非常に参考になる本である。2006年刊行、272ページ、ハードカバーの立派な書物である。なお、日本人の作家に関して、峰芳隆さんが編集に協力されている。

試みに私が数えてみたところ、日本からは32名が掲載されている。ところが、そのうちの相当人数が私には馴染みのない名前であった。小林司氏は上記のエッセイでその名前を掲載している。具体的には、長谷川テル、出口王仁三郎、エロシェンコ（エスペラントの著作活動は主に日本滞在中に行なわれたので）、林健、磯部晶策，伊東幹治、伊東三郎、川崎直一、小西岳、栗栖継、黒田正幸、前田茂樹、宮本正男、森田健夫、村田慶之助、中村陽宇、世古口健、冨田冨、岡一太、小坂狷二、大里義澄、田畑喜作、竹下外来男、田中貞美、谷口高、上山政夫、八木仁平、山田天風の28名である。ただ、これ以外にも、この本に掲載されている執筆者が４名ある。福田正男、西村正雄、柴山純一、露木清彦である。

小林氏は、この人選には若干問題があるとして、外国での編集だから、不可能に近いがと留保しつつも、秋田雨雀、岡本好次、梶弘和などが登場してもよかったように思われると記しており、同感である。また、小林氏は指摘していないが、これらのうち、Japana Variacio（1978）のみに作品が収録されている者が16名、Japana　Kvodlibeto（1965）のみに収録されている者が７名、いずれにも収録されている者が３名、いずれにも収録されていない者が６名ある。この２冊のアンソロジーが人選の基礎資料となったことがうかがわれる。無論、この２冊は刊行された時点での有力な書き手を収録しているのだろうが、いずれも刊行されてから相当期間が経過している。日本人に限らないであろうが、人選の難しさが実感される。

さて、本書を時折手に取ってページを繰ってみるのだが、そこに掲載されている書き手の大部分は、私がその名前さえ知らず、ましてその作品は読んだことすらない人ばかりである。もちろん、ふだん私などが目にするエスペラントの本や雑誌は知れたものであるが、それにしても、いかに自分が怠慢であるかが痛感される。最後に。いずれ本書の改訂版が刊行されたあかつきには、ぜひ猪飼吉計さん、山田義さんの名前と顔写真をそこに発見したいものですね。

（後　記）

小林氏のエッセイは、朝日新聞社のPR雑誌『一冊の本』の2007年10月号に掲載された。なお、朝日新聞出版のホームページにその全文が掲載されているので、読むことができる（http://publications.asahi.com/issatsu/story/200710_2.shtml）。

佐々木照央「虐殺された世界語者達」について

伊藤俊彦

ソ連のエスペラント運動の歴史を調べていると、そこに名前をとどめるエスペランティストの大部分の没年が1937年とか1938年とかになっているのに胸をつかれる。言うまでもなく、彼らはスターリンの大粛清のさなかに虐殺されたのである。Urlich Lins の La danĝera Lingvo はもとより、例えば、Halina Gorecka と Aleksander Korĵenkov の共著の小冊子 ESPERANTO EN RUSLANDO（2000）の巻末に掲載されている biografieto を見ても、まさに死屍累々という感じがして、やり切れない思いにとらわれる。

さて、表題の論文であるが、先般、名古屋エスペラントセンターに送られてくる各団体の機関誌を整理していて、鈴木君がたまたま見つけて教えてくれたのが、関東エスペラント連盟の機関誌 Ponteto 231号（2008年11月発行）に掲載された、この論文であった。その後、調べたら、同じものが著者の「佐々木照央の部屋」と題するホームページ（"http://members.jcom.home.ne.jp/verda/sasaki.htm"）にも掲載されていることが判明した。著者は埼玉大学教授である。

著者はこの論文で、ソ連のエスペラント運動の成立、ランティの率いるＳＡＴとの関わり、党内闘争の激化と大粛清の開始のただなかでのソ連のエスペランティストの最期などについて簡潔に描写しており、ロシア革命から大粛清による運動の壊滅に至るソ連エスペラント運動の消長を知ることができる。ネクラーソフ、ドレーゼン、ヴァランキン、ミハルスキイといった、当時の代表的なエスペランティストたちが次々に登場し、いっとき華々しい活躍をした後、歴史の闇の中に消えていく。しかし、著者が指摘するように、たとえ彼らは死に追いやられても、彼らによって書かれた「作品」、すなわち、ネクラーソフの翻訳、ドレーゼンの言語論、歴史記述、ヴァランキンの文学作品、ミハルスキイの詩は今日まで残っているのである。

私は、ロシア語は全く読めないので、著者がロシア語の資料を発掘して、当時のソ連エスペラント運動の状況を探る本格的作業がなされることを期待する。ネクラーソフがエスペラント訳したプーシキンの『エヴゲーニイ・オネーギン』もいつか読んでみたい。

2009年１月26日の朝日新聞朝刊　ひと　欄に欧州各地でそろばん普及活動をするマルカリアン　君江さんが紹介されました

ひと

欧州各地でそろばん普及活動をする

マルカリアン 君枝 さん(71)

編集後記・　「センター通信」はお申し出があれば電子メールでPDF形式のカラー版をお送りします。電子媒体をご希望の方は山田 yamadapiano@mac.com へお知らせください 。誌面について感想もお寄せください。3月14日の総会でお会いしましょう。センターの床は掃除機と雑巾をかけておきました。

「センター通信」編集：山田義